

記念誌「あゆみ」によせて

PTA会長 宮 城 照 明

吾等は1952年8月、八重山開拓先遣隊として、本地区に入植いたしました。当時の学校はと申しますと、同年4月に開校したと言う在籍7名に先生はお一人で小学校1年生から6年生まで教えて居られました。

入植当時一番悩んだのは開拓地からの学道がないこと、瓦葺き1棟1教室で余りにも小さい陰気な山の学校であった事でした。学道がない為、草の中を分けてゆっくり歩き朝は草木の枝葉に宿る露にびしょぬれになる始末でありました。吾等は入植最初の作業として、急いで木を切り、草を払い、地を均して学道を開きました。

家族入植に伴って在籍も40余に激増したので校区民が力を合わせて仮校舎を建てましたが暴風の為に倒れ、再び2教室を立て直したこともあります。私たち校区民は日頃何とかして富野分校を他の学校並に盛り育て子供らが安心して幸福に教育を受けることが出来るようにしたいものだと考えました。これが父兄否全校区民に与えられた使命であり、当然の責務であると強く念頭から離しませんでした。私の母校古堅小中学校は在籍1000余名に職員は30余命、広々とした便利な場所に立派な学校は建てられています。この様な学校から不便も甚だしい山の学校にしかも生まれたばかりの不備府完の小さな学校に通学する子供らが気の毒でありました。幸いにこんな学校でも吾らの学びの園だと不平を云わずおとなしく黙々と学業にいそしんでいました。その姿を見て父兄として何とも云えない感に打たれました。吾らPTAは心を合せ力を合せ苦みを我慢して学校造りに毎年毎年頑張りました。運動場を見て下さい。校門、校舎、水道施設を見て下さい。図書その他を見て下さい。学校造林を見て下さい。これ皆会員の汗の結晶であります。僅々数年にして見違える程立派な学校になりました。子供の明るい顔を見て下さい。頑丈な体を見て下さい。すくすくと伸びる子を見ると我ら親心はこれ以上に勝る幸福はないと思います。

私達は学校創立5周年を記念する本年に銘記すべきことがあります。これは宿望だった分校が富野小中学校として完全独立をしたことであります。なお、初代校長に本校創立当初からの育ての親であられる大田正吉先生をお迎え致すことの出来たことであります。独立富野校に大田校長先生、校区民は喜び万歳を唱えたのであります。吾らPTA会員は悪条件下の僻地教育に部落民と共に連携して教育道にご尽力なされる大田校長先生始め諸先生方の御功績を讃え、何とお礼申し上げてよいやわかりません。感激の念で一杯であります。

月日は過ぎて我が校も創立5周年を迎えました。5周年を迎えるに当たって、5周年記念事業を為すべきだとの校区民の熱意が燃え上がり記念事業期成会を組織して事業計画をたて、その完遂するに当たって遠くは、母村読谷村、同村波平、楚辺部落会や同村出身者の有志の方々や大田校長の朋友昭和自動車会社社長久保田盛宏様などから多大な芳志を戴き、なお川平校区民の有志からも御同情と御援助がありまして誠に感謝感激に堪えません。校区の諸氏も我等の記念事業に対しては、全智を發揮し、自由な立場で出来る限りの御協力を賜りました。このうるわしい心尽くしに唯々感謝いたし敬意を表します。計画の記念事業も多角的に、実を結びまして会員や子供らと喜びを共にすることをこの上なく嬉しく思います。

なお、卒業生は進学率も百パーセントで既に八重山農高卒業生2名を出し、現在同農高校に4名北部農高に1名の在学生在が居り、後輩を激励しています。その他の卒業生も模範青年になって、農事に精励し修養にも勉勵し部落発展の原動力となっています。誠に心強い歩みを続け現状にまで漕ぎつけ、創立5周年の盛典を挙げる事の出来る喜びは何とも言えません。これ全く関係各方面からの物心両面にわたる御指導、御援助の賜と厚くお礼申し上げます。今後も私共は一層学校教育に力を注ぎ、良い校風を作り各位の後高志の万分の一にも報いたい覚悟であります。今日の祝日に、我が富野校の歩みを省み校運の隆昌を祈りまして祝辞にかえます。

5カ年を省みて

元富野部落会長 砂川 重太郎

富野校創立5周年記念式典に当り本校5カ年の歩みを記し心からお祝い申したい。

私は元来樺海出身であるが日本帝国海軍現役兵を振り出しに故郷を離れること16年余、終戦で帰って見ればわが故郷はマラリヤの為に荒れ果て廃村状態になっていた。一時は失望したが、故郷の復興を思い立ち勇気を振り起した。当時「とみの」に日本軍の引揚げた兵舎がありその兵舎を住居に利用して、56戸が入植し裏石垣開拓に取組んだ。これが富野部落の始めである。私は一足おくれ1950年樺海の復興を念じて入植した。入植当時は諸悪条件のもとで苦難や貧困と戦いながらも富野部落民の宿望は第一学校設置、第二道を開き交通の便を図ることであった。1952年元旦ささやかな集いをもった部落民は本年こそ学校設置に総力を挙げることに誓い努力を払った。「天は自ら助くるものを助く。」「たたけ、さらば開かん」と私達の学校設置の熱情は政府を動かし八重山群島政府は1952年2月25日川平小学校富野分校設置を認可された。私達部落民は夢かとばかり大いに喜び、歓声を挙げ当局の安里知事、宮城文教部長に心から感謝の意を表した。然し学校設置の喜びはやがて建設への苦難の道へと展開されて行かねばならなかったのである。いざ学校建築となると余りにも大きい難事に遭遇した。と云うのは交通不便な山間僻地の学校建築請負業者へ5万余に相当する労力ならびに資材を提供することであった。学校は欲しいが11戸の部落民にしては耐え難い負担であった。当時の部落会長、砂川重雄氏はこの難題解決の為に川平部落会青年会に対し絶大な援助を乞うた。川平部落会同青年会は心から同情し、砂利運搬その他の御協力を賜った。茲に記して感謝の意を表す次第である。部落民は海から資材の搬入、山から資材の取り出し、敷地の伐採、地均しや建築雑役と1ヶ月余も家業を省みることが出来なかった。校舎落成前、私は後任部落会長となった。校舎は落成したもののこんな山間僻地の食料事情も不安なこの学校にどなたを先生にお願いするかと云うことが次にきた難題であった。

一難去って又一難来るの状態であった。ところが天は我等部落民に幸を与え給うたのである。即ち当時八重山群島政府文教部社会教育課に大田正吉氏がおられたが氏は石垣小学校時代私と同級生であった。私は氏により先生を文教部で世話して下さるようお願い、なお遠慮なくよい先生の配置が困難なら是非あなたがこの学校の世話を見て下さるようお願いした。氏は感ずるところあって承知するとのことであったが最初は私も部落民も半信半疑であった。4月になっても教員は赴任せずやはりこんな山間僻地には誰もきていただけないのかとの思いで、私達は不安と悲しみに打沈み対策を練っていた。そこへ大田先生がお見えになって学校開校を4月29日にするという事だったので部落民は夢かとばかり驚き大いに感謝感激した。この感激は一生忘れることの出来ないものであろう。4月29日の吉日富野分校開校式を挙行了。それから五星霜在籍全校7名、先生1名の学校からふみだした富野分校は現在独立校となり校運はいよいよ隆盛で現状にいたったのである。

これは樺海開拓団の入植による米原部落民と富野部落民が一致協力して、教育第一主義であらゆる艱難辛苦と戦いつつも教育を守り育てたことと、校長先生初め諸先生方の愛情に満ちた御精励の賜であり、同時に生徒諸君が開拓地学校としての「よい子」の本分を尽くし、立派な校風を建てるべく日々努力を怠らないからである。私達校区民は総力を結集して創立5周年記念事業の数々を遺し輝く学校の歴史を築いた。これから後も更に一歩強く前進し、私達の学校がますます発展することをお祈りし学校創立5周年記念式典のお祝いのこととする。

母校の発展を祈る

第一回卒業生 富村光子

1952年10月30日、政府計画第一回八重山開拓団の家族入植で桴海地区の海岸に上陸しました。11月2日に富野部落や開拓地を見て廻りました。その時、山の中に一軒の瓦ぶきが淋しく大木につつまれて建てられてたのが不思議に思われました。

あとで知ったことですが、沖縄のにぎやかな大きい学校から来た私には、それが学校だとは全く考えられませんでした。前の細い山道に立って民家にしてはめずらしい、そうかといって学校にしては余りにも建物や庭が小さすぎると思いながら、明けて4日より富野分校に通学する事になり、先生に連れられて登校しました。

昨日の不思議な瓦ぶきの前まで来て、

「こちらがこれから皆さんが勉強する学校です。」

と先生にいわれて、昨日の疑問は火に水をかけられる如くうち消されると同時に、何となく淋しく涙がこぼれるばかりでした。

間もなく鐘の合図で教室に入り、二人の先生を前に37,8名の生徒が明日からの授業の事についてお話を聞きました。話を聞いていると、淋しさと不安で胸がはちきれんような思いがして来ました。

10坪位の庭を前にした1つの瓦ぶきが山の中に淋しく建っている。

これが学校だとはほんとにいまだに考えられない位でした。

当時の学校の姿を思い出し現在の堂々とした立派な姿と比べると何だか夢のような気がします。

道も木や草でおおわれ、青空を見ることもできない暗い山道の草をかきわけかきわけ、朝露にびしょぬれで通学しました。雨の日など川が大水となり、下級生をおぶって先生の手につかまってぬれて寒い思いをした事も度々ありました。胸がぞっとする程おそろしい悪条件の自然と戦いながらも、私達生徒は皆少しの病もなく通学し、小さい校庭で二人の先生と共に学び、また瓦ぶきの前に大きな木のかぶが二つ仲よく並んでいたがそれを遊び道具として元気よく遊んだ。運動用具といっても何一つなく運動場といっても小さくて何かにつけて不自由な山の中の学校でありました。日中は生徒達が庭いっぱい遊び夜になれば猪が出て来て庭いっぱい暴れ廻るような状態でした。

このような山の中の小さい学校が日々に姿を代えていきました。父兄や部落民の力によって、かやぶきの教室が建てられ、小学生と中学生がやっと別々に勉強する事が出来、楽しい学校生活が始まりました。

今までの淋しさは、沖縄のさわがしい学習の場に比べて静かな学習の場と変わりました。今では小鳥の鳴き声もかえって励ましの楽しい音楽となって聞く事ができました。

このような楽しい学園でしっかり勉強しようと思った頃は早三月、私にとっては三月といえば卒業、お別れという淋しい月でした。この楽しい学園と別れなければならいかと思うと何となく緑の自然を憎まずには居れません。

何時までも何時までもこの楽しい学園で可愛い弟、妹たちと勉強したくなります。

しかし、そうは世の中は許してくれません。卒業して社会人として、先輩として母校の発展のために励むより以外はないなど思いながら楽しい学園を去って行きました。

私達の卒業後も日々に発展していきました。しかし自然は人間の血のにじむような努力をものともせず折角建てられたかやぶきの教室も5月の台風でたおされ、再び不自由な2部授業、木の下での授業へと逆もどりしてしまいました。

そこで、生徒達は自分たちの手で先生方と共に力を合わせて形ばかりの仮小屋を建てて不自由な2部授業を取り去る事が出来ましたが、父兄や部落民はその涙ぐましい状態を見て、再び仮校舎を建てる事に決定して着工いたしました。出来た仮校舎は前よりも強くて板壁の教室が建てられました。

1954年の1月には、中学校の分校設置が認可され、川平小学校富野分校の名札が川平小中学校富野分校として発展の姿を見せました。

私たちの母校は自然の悪条件と戦いつつ休む事なく発展しました。8月にはブロック建ての永久校舎建築が始められ、可愛い生徒たちを抱いたすばらしいブロック建ての教室が一つ校庭に勇ましい姿を見せました。

運動場も開校当時の十数倍に広められて、今では開校当時の生徒の遊び用具としてつかわれた木の根も姿を消してしまって、全く見違えるような校庭となりました。

10月には富野分校第一回の大運動会を行う事が出来ました。

運動場や生徒の数は、大きい学校の比喩物にならないが、生徒の技といい決して他の大きい学校に勝ることはあっても劣りはしないと思われました。

その後、水道が設けられおいしい清らかな水が校庭にあふれる程流れました。その後、石垣島一週道路が開通され、今まで草をかき分けかきわけ、毎朝つゆにぬれて通学した道も今ではなつかしい思い出の一つとして頭の中に残るのみです。

1956年3月には2度目の永久校舎の建築が終り、二つのブロック建てが仲よく並んで堂々とした姿で生徒たちを保護しています。

このように、校庭には見事な校舎が立ち並ぶし、運動場は年々広くなり、教員数も生徒数も増し、わずか5年そらでこれ程見ちがえる程発展するとは夢にも思いませんでした。

1957年4月には、立派な校門と同時に富野小中学校の門札が新しい校門を一段と美しく飾ってくれました。

顧みれば短いような、長いような5年という年月を迎え、ここに5周年式典を持つ事の出来たことは第一回卒業生にとって、何ともいえない嬉しさと喜びで涙があふれるばかりです。

最後に母校の発展をお祈りいたします。

小さい学校だから

富野小 5 年 上 地 真喜子

2 年生の 3 学期のとき、わたしは富野校に転校してきました。あまりにも人数が少ないので、びっくりするやら、さびしくなるやらで、なみだがでそうになりました。

登野城校では、1 学年で 200 人余りの生徒がいるのに、富野校は、全校で 12 名しかいませんでした。わたしの組は、たった 2 人です。ワイワイガヤガヤ、休み時間はにぎやかだし、勉強時間は、意見がたくさん出た登野城校にくらべ、ここでは鳥の鳴き声が遠くから聞こえるくらいとてもしずかだし、組の人は 2 人でも学年がちがうので、意見もほとんど出しません。だからわたしは、ぼんやりしていただけでした。

でも、毎日来ているうちに、お兄さん、お姉さんたちが遊んでくれたので、嬉しくなってきました。体育や音楽はみんないっしょなのでわくわくします。特に体育の時間は、先生もいっしょにするので、ますます楽しくなります。人数は登野城校より少ないけれど、何をするのもみんないっしょなので、とても楽しいです。

この学校へ来て、テニスもじょうずになったし、ピアノは先生がつきっきりでおしえてくださるので、だいぶひけるようになって、今は合奏も独奏もできます。ですから、うれしくなって休み時間などにもひいています。

それだけではありません。ふえもじょうずになり、今度の八重山地区音楽発表会には、中学校のお姉さんたちといっしょに出ました。たくさんの人の前にすわったとき、むねがドキドキしていましたが、「ドナドナ」という曲をふき終わったとき、大きなはくしゅがわきあがったので、うれしくなりました。

大きな学校ではできなかった、いろいろなことができる学校。なんでもじょうずになしてくれる学校。もう 30 歳になったけれどももっともっと楽しんでほしいです。

のびよ！富野校

富野小6年 堀川英則

「今年、創立30周年をむかえます。30周年ということは、人間にたとえると30歳というピチピチした年ですね。その学校ができたころの様子をおばあさんに聞いてごらんください。」と、先生がおっしゃいました。

ぼくは、さっそく聞いてみました。祖母は、こたつに入り背中をまるめ、なつかしそうに、「むかしの道はね、道はばがせまくてほこりだらけのガタゴト道だったよ。それに、雨がふると穴があいたり、どろんこになったりしたよ。それに母ちゃんなんかの小さいころは学校がないから、しか（石垣）の学校にいかせたのだよ。今のように車がないから、しかの人にあずかってもらって、その家から学校に行ったんだよ。また、富野に学校ができた当時は、今のように車もなく、道も悪くて交通の便もなかったのので、先生方はしかから引っこしてきて、豚をかってくらしていたよ。また、校舎はかやぶき屋だったので、台風が来ると屋根はとぶし、かべはこわれるし、とても大変だったよ。」と、目をほそめて言いました。

ぼくは、「昔の人は、不便な中で子供を学校に行かせるために、ずいぶん苦労したんだなあ。」と思い、今のぼくたちの通る道はアスファルトになっているし、横断歩道もあり、すごく恵まれていて幸せです。

また、台風が来るたびにこわされた校舎を、村の人たちは畑仕事をさいて直さなければならなかったという。ぼくは、祖母の話をもっとくわしく聞いて、当時のことをぼくが大人になるまでしっかりおぼえておき、自分のはげみにしたいと思います。

去年の11月にこわした校舎は、富野校にはじめて建てられた鉄きんコンクリートの校舎でした。その校舎が建てられたとき、部落の人たちは「もう台風が来てもだいじょうぶだ。」と、どんなに喜んだことだろう。あれから約20年もの間、雨風にたえて来た校舎。そしてたくさんの先ばいたちを巣立たせた校舎……。

ぼくが、1年に入学してから今まで勉強してきた校舎だから、くずすときはさびしい気持ちでいっぱいでした。

そして今、新しい校舎ができつつあります。でもそこでほとんど勉強することなく、中学校へ行ってしまうのが残念です。しかし、これから先この校舎で多くの後輩たちが勉強し、富野校がますます大きく発展していくことを願っています。

開拓の跡を聞きつつ

中学3年 比嘉良則

この学校ができる前には、まるで原始林のように木はおい茂り、大きな岩が肌をむき出しにしてはびこっていたと言う。こんな所に校舎が建てられるとは、とても想像ができなかったであろう。しかし、PTAの方や部落の人達が何十日間も土や汗にまみれ、伐採・石運びを行って、校舎一棟が建つほどの広さにしたとのことだ。手にはいくつもの豆ができ、夕方には口も聞けないほどに疲れたことだろう。

当時、ブルドーザをここまで運ぶことは不可能だったろうから、すべて人間の力にたよることしか方法はなく、仕事もなかなかはかどらなかったと思う。それなのに、最初にできた校舎がかわらぶきだったというのだから驚きである。

その後、校舎は台風のために倒れてしまい、かわりに建てたかやぶき校舎で授業をしたそうです。年がたつにつれて、児童生徒もだんだん多くなり、107名もいた年があったとのこと。僕はこんな不便な地で、苦労して勉強させていた方たちのことを思うと頭の下がる思いがする。

107名もいたというこの地も、大型台風やかんばつのため生活が苦しくなり、土地を企業に手放し、この地を去って行く人がいて、今ではたった8人になってしまった。

そして今年、数々の苦しみや楽しみを抱いて富野小中学校が創立30周年をむかえました。学校の歴史を振りかえって考えたとき、107名もの児童生徒が当部落にいたのだから、昔のようににぎやかになるのも夢じゃないと思います。なぜなら、現在建設中のトンネルや、大田部落の養殖場が完成したら、交通も今より便利になるし、当部落のすばらしい所をよく知っておられる方々が、引っ越してくるような気がするからです。だから……。

この30年を節目に、私達の学校、富野小中学校はますます発展していくであろう。ですから、ここを卒業してゆく者として、先輩たちがきづきあげた良き伝統を守り、後輩たちにも教え、いつまでも良い学校にしてゆきたいと思います。

富野校の発展を祈って

山城京子 (30周年時教師)

創立30周年おめでとうございます。

このめでたい年に巡り合い、ご父兄の皆様をはじめ地域の皆様と共々祝福できることを、この上なく嬉しく存じています。

聞くとところに依りますと、富野部落は第2次世界大戦後、創立されたとの事、その後間もなく学校が誕生したことになります。ですから、部落と学校は今日まで同じ歳月を歩み続けて来たことになり、部落の繁栄は学校の発展と密接な関係があると思います。そういう意味で本校が今日30周年を迎える事が出来たのも、まさに部落の方々の生産に対する情熱と並々ならぬ努力、それと共に教育に対するご理解とご協力があればこそと、感謝の念でいっぱいです。

しかし、ここで懸念されますことは、毎年減少の一途を辿っております過疎化現象であります。30年を人生にたとえるならば「30年にして立つ」といわれている通り、ようやく学校としての基礎固めが出来たというところでしょうか。

この最も大事な節目を迎えたわけですが、どのようにしてこの過疎化現象を抜け、更に繁栄、発展させていけばよいのか、それは部落の皆様にごえられた大きな課題だと思います。この課題を背負って立つのは、ご父兄の皆様と共に今後大きな協力者となる児童、生徒の皆さんではないでしょうか。

雄大な東シナ海を背に、前には豊かな亜熱帯原生林を仰ぎ、澄みきった空気、肥沃な土地。そして小鳥のさえずり等々、恵まれた富野校の自然環境は申し分ありません。児童生徒の皆さんは、父母たちのこれまでの苦勞に応える事は勿論、このすばらしい自然に応えるためにも精一杯励んでもらいたいと思います。なお小規模校にのみに与えられた児童生徒と教師間の親密な心の交流を大切に、そしてやがては自分の郷土を愛する青年に成長してほしいと願ってやみません。

通勤にマイカーを持たない私は、今日も先生方の高級車に便乗させていただき、舗装道路の上を心地よく走る車窓から、朝な夕な変わるすばらしい海の眺めや野山の風物を楽しんでいます。そんな時ふと24、5年前、短大を出てすぐ富野校に勤めた妹の話が思い出されます。

当時、裏石垣一帯は陸の孤島ともいわれ、道がすごく悪く、交通が不便だったため妹は部落の民家に下宿していたのですが、その年、大きな台風が来て屋根が数ヶ所こわされ、雨もりがひどくて一晩中眠れないまま夜を明かした事、母が自分の事を心配し長い道のりを歩いて食物を届けてくれたことです。今ではちょっと考えられないような苦勞があったんだな一と、妹の話を通して創立間もないあの時代の部落の方々をはじめ、教師を含めた先人達の苦勞が偲ばれるのです。

時代の流れはどのように変わっていくのだろうか。ふとそんな事を考えさせられるこの頃です。近い将来には石垣島横断道路が出来るということです。それが実現すれば、その暁には富野はその基点となる事も考えられ、明るい灯を見る思いが致します。

この栄えある30周年にあたり、児童生徒の皆さんには決意も新たに大きな夢と希望をもってますます学業に励むようお願いすると共に、富野校の弥栄を心よりお祈り申しあげます。

桴海の印象

新垣 精一 (30周年時教師)

富野小中学校に勤務してやがて一年になろうとしている。

私の教職経験の中で、俗に島内へき地校といわれる地域への勤務がなかったのも、去った人事異動では是非そういう学校へ転勤させてくれることを希望していた。なぜなら、そういう所が好きで私の性に合っているからだ。こちらに勤務するまでは、富野中学校に対する認識にははっきりしたものがなく、小さな学校だというイメージはあったが、西廻りで島内を一周した時、吉原・米原・富野の所在に確かなものはなかった。

着任式のとき、校長の紹介を受け指揮台に立ったとき、目の前に山があつてそのすそ野に運動場と校舎があり、緑一色の中で小中合わせて9名の生徒が横一列に体操体形の間隔で並んでいた。私は本土のある山間地の分教場に赴任したような感じであつたからである。まさに大自然の中に学校がある。私は爽快であり、こういう学校にあつて何年間か勤務が出来ることが嬉しくてならなかつた。

こちらの学校に勤務がなつたとき、ちょっと気になつたのは、市街地から見ると於茂登岳の裏にあり、遠隔地であり通勤が大変だということである。しかし道路は舗装され、所要時間35分程であり、学校までの道のりは快適である。

山バレー溪谷に差し掛かる頃から山が海にせまり、さわやかな風に変ってくる。米原に群生するヤエヤマヤシ、道路ぞいや谷間に見られるヒカゲヘゴ、まさに八重山が亜熱帯地域である証である。海を見ると、野底崎から川平石崎にかけての礁脈に打ち寄せる白波がますます辺境の地を感じさせる。そんな山や海を見ていると、「私は、富野校に勤めることができ本当に良かった。」と、思うのである。

夏は、山バレーの浜で比嘉君・真栄里君・波平先生の4人でキャンプをし、グルクン釣りをして楽しんだし、その海に潜り熱帯魚の群有する海の壮観さと美しさも見た。翌日は台風接近のため海が荒れる北風の中を、山バレーから米原まで岸づたいに3人でボートを引っ張っていったこともあつたし、学校の前の滝を川づたいに登り、その滝の上から学校を遠望したこともある。夜の穏やかな海上でイカ釣りをして、3人で仲よく一匹ずつ釣ったこともあつた。猪の罾を仕掛け、(まだ一度もかからない)、山にも通つたし、コノハズクや虫の鳴く夜の静寂な宿舎で勉強したこともある。

桴海は理科教育教材の豊富な所である。野鳥はいるし、昆虫も多い。カエルやヘビもよく出現する。こちらでは、それらの動物の生態を観察させてもらっている。時たま、宿舎で泊まることがあるが、その時飲む酒の味はまた格別である。

3月には2人の中学生も卒業し、桴海の山・海を散策する仲間がいなくなり淋しくなるが、こちらに勤務している間は桴海の良さを満喫したいと思っている。

30年を振り返って

知 花 静 枝 (地域在住)

30年という年月は、長いようでもあり、また時の流れはまたたく間に去っていったようにも思われます。

私達にとって、この30年間には、感慨無量でありました。

昭和27年、道という道もなく、うっそうとしたジャングルにおおわれ、マラリアの本拠地といわれたこの地に、一棟の教室が建てられてから、早30年経ったわけです。

今日の本校を思いますと、当時の様子を知る者にとっては、信じられない思いがします。本校が川平分校として創立された当時は、机・腰掛け・教具とてない有様で、先生方と生徒が、共に学校整備のため涙ぐましい努力を数々やりながら、教育の灯をともし、子供達の教育に絶えまない活動を続けてこられたお陰で年々発展して参りました。

本校を卒業していった多くの人々は、今日、立派な社会人として社会の各分野において活躍しております。その方達を見ていますと、本校がこれまで果たしてきた役割の大きさに驚かされます。これからも、本校の果たす役割は増すことはあれ、決して少なくなる事はないであります。

しかし、若者の流出により、次の時代を担う者がなく、また、復帰の混乱と、旱魃・台風などにより、多くの方々がこの地を去っていきました。現在、本校には、数年前の面影はもうほとんどありません。喜びに胸をふくらませた入学式も、3年前からは新入生が一人もなくて出来ません。

このままでは、廃校になるのも目の前だということでもあります。このような現状の中で30周年を迎えることを残念にも思い、また淋しく感じるのでもあります。

今後とも富野校が発展し続ける事を祈りながら、筆を置きたいと思います。

与えられしものに感謝して

又 吉 カツ子 (地域在住)

八重山はヤキイ (マラリア) の島と言われていたので、私は移民の話が出た時、母は絶対に許さず、どうしても行くのなら親子の縁を切ると厳しい態度だった。この反対をおしきって移民をするのには、長い時間と勇気が必要でした。

未熟で何ひとつ経験のないままに、現在の地、米原に入植したのです。当時の八重山は、港らしい港もなく私達は現在の米原の北海沖に、今はなき、「みどり丸」という小さな客船から、干潮になるのを待って、浅瀬をたよって上陸しました。海上からの島を見ると、高い山が重なり合い、山また山の波が続いて人間の住めるとは思えないほどでした。幼い頃呼んだ本の中に、ジャングルという言葉があったが、まさにそのジャングルの中に自分が住もうとは夢ほどにも見なかったことです。結婚したばかりの私がここへ来て、これから自分はどうすればよいのか、子供の教育や食糧問題など我身に重くのしかかり、後戻りすることも、前進することもできずに途方にくれ、母の反対したのも無理ない事だと、母の言葉や顔を思い浮かべ、涙を流すこともしばしばでした。しかし、成り行きにまかせるより仕方がなく、毎日が不安で闇の中をさまよい、一日がおわれば胸をなでおろし、今日も生きて無事過ごせたことに感謝したものでした。

学校での先輩達は校舎造りと開拓が日課のようでした。校舎といってもカヤブキの仮校舎ですから、台風がくれば一夜にして失われ、また翌日から校舎造りということを繰り返した末、各方面から文化の波は押しよせられ、富野校にも鉄筋コンクリートの校舎が建てられました。でも民家はまだまだカヤブキが多く、台風や旱魃と度重なる災害と交通の不便さに耐えかねて、汗水流して求めた土地も学校もすべて、都会や故郷へと引き揚げる方達が続出しました。

私の頭から、今なお消えないことのひとつに末娘の事があります。ある日、娘は悲しい顔で「皆転校して私が中学へ上がる時には女生徒は私一人しか残らないよ。母さん私達も読谷に引き揚げようよ。」と言った。いよいよ自分にも決断する時が来たのだ。娘にだけは自分のような苦しみを味わわせたくない！そう思うと、胸の底からこみ上げてくるのを押さえきれず、娘に返す言葉さえなかったのです。娘のためには・・・。

そう思っても私には引き揚げる費用もなく、たとえ行けたとしても住む所もないのだから、心を鬼にして「男の中の女一人、なんでいやなの。男も女も変りはない！あんたも男のように強くなるんだ。」と、励ましにもならない言葉を言ったのです。

早く道路も出来て、交通さえ便利になればいいのにとつくづく思いました。いろいろな思いをいただきながら、6名の子供達は本校を巣立ち、実社会に出ることができましたことは、常になぐさめ励まし、ご指導してくださいました先生方や先輩方のお陰だと心から感謝申し上げます。

また、私には公務員という立派な仕事が与えられ、あの苦しかった当時の事を思い出すときに、「苦あれば楽あり」と昔の人はよく教えて下さったものだと感じさせられます。30年といえば、昔といわれますが私には悪夢からさめた昨今のように思えます。

今は、校庭も小鳥のたわむれる静かな風景で、生徒数も少ないのですが、子供達を御指導なされる先生方は一心不乱に頑張っておられます。ですから、富野校で学ぶ生徒達は本当に幸せだと思います。富野校を去っていった若者達も、自分の子供にはのどかな校庭の中で学ぶ機会を与えてください。古い校舎から新しいモダンな校舎へと変り、生徒達も健全な心と体のあたたかい心の持ち主になると確信いたします。

30周年を期して復活することを心から祈りつつ、ここを去って行った若者達が戻って来ることを期待します。

創立30周年を祝して

初代校長 大田正吉

「歲月人を待たず、光陰矢の如し」富野校が創立して30有余年を迎えることになりました。10年ひと昔と云いますので、創立は3昔前のこととなります。創立準備から6カ年勤務したあの頃あの時のことなどを思うと実に感慨無量であります。

八重山群島政府は裏石垣の振興策として、富野に学校設立を決定し、1952年2月25日に、川平小学校富野分校設置認可となりました。当時終戦後のことであり、道らしい道もなく、マラリアは猛威を振るい食糧の入手も至極困難であり、電信電話はもとより電気水道施設等皆無であり、教員宿舎もない状況でありましたし、富野の地名さえ世に知られていない時代でありました。その富野校へ私に反対する妻や親類友人の意見を押し切って、悲壮な決意で赴任いたしました。辞令は次の通りです。

八重山川平小学教諭に任ず 月俸3,250円給与 八重山川平小学校富野分校勤務を命ずる 八重山群島政府

さて、同年4月29日開校式を挙ることとなりました。教師は私一人で小使も誰もいませんでした。開校当時のことが5周年記念誌に次のように記録されています。

「ささやかながらもいとも厳粛に開校式を挙げました。当時在籍全校で7名。全琉で最も小さな単級学校で、来賓もわらじ履き、地下足袋姿の山越えとあって少ないばかりでなく、来賓も丸太造りの長椅子で応じた状態で世間には余り知られずして開校したのでありますが、富野部落民の感激はひとしお深く、老若男女総出の盛典で、ここに富野校は歴史的な第一歩を踏み出したのであります。……」

その後米原開拓団の入植で児童生徒は急増し中学校も併置され、二部授業や仮教室の建築等両部落民の御協力によって学校施設も年々整備されました。更に歴代校長先生や教師児童生徒が一体となって御尽力されたお陰で学校は発展いたし、すばらしい今日の学校となりました。誠に喜ばしい事であります。

あの頃の子供らはよく学びよく働きました。道らしい道もなく自転車など縁のない生活でしたので先生方や村の人も重大用件がない限り、土曜日曜日でも四ヶ字に出ませんでした。それで結局、放課後にはおそくまで先生達は課外学習に校内美化作業に読書や遊び等々、子供等と触れ合う機会が多く親愛度も高く親子兄弟のようでした。また、父兄とひざを交え語り合う機会が多く学域の生活に総じて家庭的雰囲気であり、苦しい中にも楽しく六カ年も勤続することが出来たのです。あの頃の子らは今、社会の中心人物となって、各界に大活躍しております。誠に頼もしく心強い限りであります。

さて、創立30周年を記念して数々の事業が計画実施せられ、教育環境が格段充実いたしました。学校教育振興のため慶賀の至りであります。環境が人をつくると云われています。よい子の皆さんはこのすばらしい環境で、しっかり知識を磨き、体を鍛えて社会の為になるよい人間になって下さい。校風の質実剛健勤労愛好の逞しい精神で頑張りましょう。富野校の御発展をお祈りいたします。

次にあの頃の思い出を少々。

※暗くなっているのに

ある年、上学年は山越えの遠足をいたしました。日が暮れて暗くなっているのに帰校しません。帰路迷い道をしたのです。学校も部落もそれは大変な心配でしたが無事でした。

※山監守小屋の生活

単身赴任した教壇実践を語る同僚もなく宿舎もなく、市役所の山監守詰所にお世話になった時の事です。隔絶された暮らしは苦勞してお酒を入手し、一日の無事を感謝いたして語り合うのですが、毎晩の様にこの酒にはポーフラがフラフラしていました。不思議なポーフラの酒になるとかで、さしつさされつ、山監守は1ヶ月交代勤務でした。

※陽（ひ）時計腹時計の授業

全く経験のない単級経営の授業は、海のもの山のものともつかない、それこそ暗中模索試行錯誤の授業を大胆にやったものだと感心していた頃のことです。元気のよい子らが暴れ回ってテーブルの私物目覚まし時計を落として大破損。交通事情も悪いのでしばし時計なしの授業続行！時間の制定は陽時計太陽の位置を見る法、腹時計胃袋と相談する方法、疲労時計は疲労度の感知法で日課を完全に消化いたしました。

※憂鬱の土曜日

今の先生方は日曜日のレクやレジャーの計画等でお楽しみの土曜日でしょうが、あの頃の生活のすべてと云っていいほど生きる以外の計画しかなく、日曜日になると家族全員が山越えをして甘藷買いに伊野田に行くのが日曜日の行事でした。ああ、明日は日曜日かと、土曜日の昼頃から憂鬱になりました。

※ハブと同居生活

あの頃マラリア蚊を防ぐ為に、各戸蚊帳は強制的に吊ることになっておりました。初夏の季節のある日、寢床を離れると横に異様なものが触れるので見上げるとこれはいかに、1メートル位のハブが蚊帳の四つ角にはい上がろうと一生懸命だが、ハブの重量で蚊帳の中央部が低くなり、なかなか上がれ切れません。この野郎と一撃、物騒な朝のひと時でした。これは住宅が掘立カヤ葺きでしたのでハブが自由に出入りでき、夜中タル木から蚊帳の上に落ちたものと考えられる。

想 出 の 記

二代校長 大 浜 孫 佑

私が富野小学校に赴任したのは、昭和33年4月でそれから38年3月までの5年間でした。今から25年前で追憶の意図をたどると、パノラマの様にいろいろな事が浮かんで来ます。

学校環境を整備しようと中学生先頭に職員もひとつになって、雑木草を切り払い明るくしたら、当時の群島政府の衛生課から環境衛生賞として柱時計一つをもらったのが喜びの始めであった。

運動場拡張整備3カ年計画にPTA、部落総動員であたり、学校環境作りで学校周囲の伐採作業、学校美化作業、学校パイン造り、学校林づくりで伐採植え付け作業、発電機小屋造りで大田部落海岸でのバラス拾い。どれが先か後か今では記憶も確かでないが、頭の中にはっきりと残っています。そうした労力で運動会に必要な録音機、発電機、それからピアノを購入し備える事が出来て学校は大変助かりました。生徒も学校美化に自主的に美化コンクールを持ち、いろいろな草花の色を学校に添えるようになりました。

僻地学校の研究指定校となり、職員も一生懸命で県の指導主事と宿舎で6名の職員が夜遅くまで、研究討議していることを聞いて部落の主婦達が夕食を奉仕して貰い、職員も県指導主事も感謝感激し夕食を取った事が思い出されます。

新校舎のできる間の仮校舎造りは部落全員が山から木材を切り出し、カヤをかってきてつくるのでした。台風で倒れたらまたつくると言う様に部落の人が校舎造りで大変力を尽くして貰いました。学校、PTA、部落、ひとつになっての学校づくりでした。部落の人はほんとうによくやって貰いました。

今目を閉じると、学校のあれこれ、部落の人々の顔が浮かんできます。力を尽くして貰った方々で、すでに鬼籍に入った人も懐かしく浮かんで来ます。また本島に、市内に移られた人もおられる様です。みんななつかしい人々です。

今度30周年で校舎も立派に改築になりほんとうにおめでとうございませう。これからも、ますます未来の栄光の道へ美しい歴史をつくられんことをお祈り申し上げます。

想　　い　　出

四代校長 仲 本 正 貴

富野小中学校の創立30周年の記念式典を挙げるにあたり記念事業の1つとして記念誌の発行が計画なされ、旧職員の私にも感想を載せてもらうことになったことは私にとって誠に光栄に存する次第であります。同じ八重山地区の教職にありながらこれまで本校の校区やその実態について全く未知のものでしたが、赴任してはじめて地域の実態を知ることができ、地域における生活の実態や教育の実情を知る事ができたのである。

米原部落、富野部落、大田部落の3つの部落があり、そのいずれの部落の殆どが八重山以外の方々の集団であることを知ってびっくりしたのである。米原部落は沖縄本島の読谷村出身者の集落であり、富野は川平の2戸か3戸以外は宮古出身の人々から成ること、また大田は黒島出身や竹富出身の者もあったが、沖縄本島や宮古出身の人々であることもようやくわかるようになった。

大正12年石垣小を振り出しに昭和47年復帰の年の4月に勸奨退職で48年間の教職最後の学校でしたので印象深いものがある。その1つは赴任が遅くなって父兄の2、3名に咬みつかれたことである。それはその年の人事異動発表がおくれたためである。その理由の1つは県当局の決断のおくれが地方の委員会にまで影響してのことである。勸奨退職者の数が予算関係で決定するのに手間取ったこと。もう1つは登小の7町内の児童の一部が平真小への分離問題が当局の予想通りいかず手間取ったあげく実現しなかったことである。そのため人事異動も発表が遅れ、各学校の始業式はすべておくれ4月10日か11日となったのである。急いで赴任した富野校は、校長はじめ教頭その他の職員も殆ど転勤で唯1人教諭が残留したのみでした。新任の校長はじめ職員が当惑したのは申すまでもない。幸いに私には父兄の中に向かいの教え子関係がいて、私に同情し激励してくれた事である・暗夜に灯を得た感のしたこと無理はない。また、その間に一般父兄も次第に事情を理解するようになり、同情するのも数多く出てきたのである。父兄が最も関心を寄せたのは中3の生徒をもつ父兄の来学年の高校入試の心配であったようで、父兄として無理もないことであろう。誠意は通じ日1日と職員と父兄の間にも心温まるものを感じるようになった。

毎年の学芸会、運動会はもとより父兄の協力は並々ならぬものがあった。大田部落の菊地氏は、毎朝夕の部落出身の子どもらの登下校を自家用車で送り迎えしてもらったのである。このことは、私の脳裏に未だにはなれないものがある。新校旗樹立のために伊波亀吉教諭が努力したことや運動場拡張のため校長自ら、ブルドーザ借入交渉に奔走したことや中3卒業生の就職のためあらゆる面で面倒をみてもらった崎山用昭教諭や給食の献立はもとより炊事に至るすべてに苦勞してもらった女教師の喜舎場則子、大浜久江、上原美代子先生らの功績は実に大きいものがある。また、唯一の残留組でした波照間英太郎教諭の新任職員に対する世話役の功績も忘れてはならないものがある。特に毎年高校入試には範を押したように志望者は全員合格であることを前校長那根亨は吹聴しておられたが、私の時代になってもそれは同じでした。また、社会教育にも夜間を利用して努力しました。3ヶ部落の青年婦人を学校に集めて成人教育を開設したのである。また、本土就職者の出発が卒業式のまえになるため、2、3名の生徒のために特に卒業式を挙げて壮行を祝ったことも今は昔の思い出の1つである。

今や時代の波は、石垣島のどの地区にもひしひしと押しよせ、富野校も過疎の波に抗し得ず僅か数名の生徒となっているが近日中に在籍を増、3～40人の在籍になるとのこと喜びにたえません。生徒の皆さん父兄の皆さん、なつかしい富野小中学校のため自重自愛なされ本校がますます栄光の道を辿りますよう念じて筆をおきます。

富野校に思いを寄せて

大 田 千 枝 (初代校長夫人)

私の今までに一番思い出深い事は今を去る 30 年前昭和 27 年の春の頃でございました。それは主人が富野校へ転勤発令を受けたからでございます。あの頃の心配と不安は今でも尚記憶に残っています。富野という部落が石垣島にある事さえ知る人の少ない時代でありました。戦後石垣市内でさえマラリアのために幾多の人名をうばったマラリアを思い起こしマラリア恐怖症になっていた時代でありました。未開地の子供等の教育の為でも命あっての物種だと有病地へ希望して行こうとする主人に徹頭徹尾反対して先輩や友人親類にもお願いして思いとどまるよう手を打ったり致しました。しかし、その意志をまげさせる事は出来ませんでした。一度決意したことについて動かすことのできない主人の性格で泣く泣く転任支度をやらねばなりませんでした。いざとなれば、皆々様が未知の国にでも行くような盛大な壮行会を催し激励して下さいました。あの当時学童は親類の家から登野城校、川平校、白保校等に通っていましたが、富野校創立で子供等は暖かい親の許に帰り楽しいわが家から通学することができたのです。あの頃の富野校は山の中で小さな 16 坪の 1 教室に全校生徒 7 人、先生は 1 人でした。開校式及び引き続き祝賀会があり親子の感激と喜びは想像に余りあるものがございました。先生も 1 人小使いも給仕も先生が兼ねるという世にも稀な学校でありました。その後長男も次男も転入学させました。それから山の生活が始まります。最初困難にぶつかったのは食生活でございました。芋をたくさん植えても猪を喜ばすばかりで部落民は張りのない気の毒な生活を送っていました。沖縄本島より開拓団が入植して隣に米原部落が建てられましたが、やはり同じ猪と知恵比べの毎日でした。入植できた以上どんな困難にでも克服する為共同作業に余年がなく一生懸命働かれました。両部落民食糧難と戦いながらも子供の教育には格別熱心で学校の作業に根気よく頑張ってもらった事には感謝感激で頭の下がる思いでございます。

入植なされた知花先生と 20 数名の生徒が登校するようになり拍手で迎えて喜びました。米原の生徒は毎日元気で先生と共に急ぎ足で登校なさる勇ましい姿が見えるようです。女生徒も増え、家庭科の重要性を感じ、及ばずながら私が共に学びつつ、担任する事になりました。オグデンさん(注)からミシンを贈って頂き一段と喜びのうちに活気が見える様になりました。学芸会は楽器ひとつなく手拍子でリズムに合わせてダンスや遊戯等致しました。

創立初めての運動会は入植当時の経済事情もあって現物寄付と話し合い、賞品は校区民手作りのゴザ、ざる、野菜等でありまして、開拓の苦労も忘れた楽しい一日でございました。文教部職員数名が前日からお泊りになり、発電機マイクの音楽放送で山中の大運動会の雰囲気盛り上げて下さいました。

ある日、庭園で女生徒がお友達の鍬で腕を切られ青ざめていました。学校には救急薬品不備でしたので強力な殺菌力のある「かまど」の上のススをかき集めて、傷の上にかぶせて包帯してあげました。

思えばあれから 30 年、あの頃お世話になった皆々様方に感謝致し富野校の御発展を祈念します。

注：オグデン (その当時のアメリカ民政府の長官)